

佐賀県農業大学校 評価表

資料 3

農業大学校 教育計画 理念	農業大学校は、将来の佐賀県農業・農村の発展を担う高い技術・経営力を持つ農業経営者や、地域の農業・農村の振興を支える指導者を育成するため、養成部門及び研修部門の教育・研修に積極的に取り組む。	達成度
重点目標	1.優秀な入学者の確保 2.高い技術力や経営力の習得 3.全ての学生の進路決定 4.農業者研修の充実	A:十分達成できている(100%以上) B:概ね達成できている(100%未満~80以上) C:やや不十分である(80%未満~60%以上) D:不十分である(60%未満)

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
I 優秀な入学者の確保	○受験者数	・受験者30名以上	・農大の情報の発信	<結果> ・受験者数は、26名であった。 推薦9名、一般(一次)10名、一般(二次)7名 <具体的取組> ・農大広報誌「緑旗」の発行 農大の行事や活動状況を紹介するため、年2回の発行を行った。 ・ラジオ番組で農大をPR広報 JAバンク佐賀の提供によるラジオ番組、「農業するばい!!」さが農大RADIO」に、学生が出演し、学校を紹介した(24回/年)。収録は農大YouTubeチャンネルにも掲載した。 ・農大公式Instagramを12月に立ち上げ、協力してくれる学生10名と共に情報発信を行った。その結果、1月末までに79名のフォロワーを獲得することができた。	B	・(共通)受験者数を増やすため、それぞれの取組をさらに充実したり、前倒ししたりする必要がある。 ・農業系高校だけではなく、普通高校や農業系以外の高校にも農業大学校の周知活動を行う必要がある。 ・高校生やその親世代にいろいろな広報媒体でオープンキャンパスと学生募集を周知する必要がある。	・受験者30名以上	・農大の情報の発信	・農大公式Instagram、YouTubeでの情報発信の強化(投稿数を増やす)。 農産物直売や実習など、週1回の情報発信。 ・広報紙「緑旗」の発行、新聞等広報媒体への情報提供。 ・二次元バーコードを各種印刷物に印刷。 ・JAバンク佐賀提供のラジオ番組で農業大学校の取組紹介と学生募集を告知。
			・各機関・団体への周知	・報道機関の協力を得ながら、入学式、オープンキャンパス、卒業式など主要行事の情報を配信した。 ・11月に校長自ら市町部長、JAトップを回って学生募集をかけ、全市町広報誌、JA広報誌等に学生募集の記事掲載してもらった。 ・全高校に6月にオープンキャンパス・学生募集のポスター、パンフレットを配布し、加えて10月に一般入試一次募集時期にもポスターを手渡した。 ・駅や公民館、図書館などの各施設に学生募集やオープンキャンパスのポスター・チラシ設置を行った。 ・同窓会会員に学生募集のPRを依頼し、ポスター設置を行った。また、バスセンターにもポスターを貼った。		・受験を希望する者に農業大学校の情報を届ける必要がある。		・各機関・団体への周知	・県内全ての高校を訪問して、農業大学校の取組紹介と募集要項、ポスターを配布。 ・報道機関各社(62社)へメールにてプレスリリースし、学生募集告知を依頼。 ・4月以降、適宜、全市町、JA広報誌、県民だより、振興センターだより等に学生募集の記事掲載を依頼。 ・駅、公民館、図書館などにポスター・パンフレットを設置。 ・同窓会会員に地元での学生募集を依頼。ポスター設置を依頼。
			・農業系高校等との連携強化	・4月に校長自ら全農業高校を回り、学生募集をかけた。 ・5月に「未来さが農業塾」の塾生(農業系高校の生徒)と農大生との交流を実施した(約50名)。 ・6月に全高校に呼びかけて募集説明会を開催した。 ・7月に農業系高校長と農大との懇談会を開催した。 ・農業系高校へ出張講義を実施した(9回)。 ・高校の進路ガイダンスに参加した(7校12回)。 ・農高生の農大施設見学受入を実施した(2回)。		・農業系高校等との連携強化		・「未来さが農業塾」の塾生と農大生との交流を実施。交流内容の工夫。 ・農業系高校の出張講義の中で農大のPRを実施。 ・5月に高校進路指導担当者向け説明会の開催。 ・農業系高校長と農大との懇談会の開催。 ・進路ガイダンス参加校の新規開拓。 ・農高生の農大施設見学を実施。	
				・追加募集を検討中)				・入試機会の見直し	・実施時期の見直しや受験機会の拡大等を行う。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
	○オープンキャンパスの参加数	・オープンキャンパス参加者45名以上	・農業系高校等との連携強化 ・農大の情報の提供 ・各機関・団体への周知	<結果> ・オープンキャンパスの参加者数は63名であった。7/6(38名)、8/23(20名)、12/20(5名)。 <具体的取組> 7/6、8/23は、参加者の興味のある2つの専攻コースを選択し、在校生との交流や施設見学及び実習体験を実施した。また、全専攻見学コースも併設した。 12/20に収穫祭ミニ・オープンキャンパスとして実施、農大の概要や質疑応答を行った。 ・上記の「農業系高校等との連携強化」に同じ。 ・上記の「農大の情報の発信」に同じ。 ・上記の「各機関・団体への周知」に同じ。	A	・高校生の進路検討時期の前にオープンキャンパスを開催する必要がある。 ・高校生(入学を検討する方)により農大を分かってもらえるようなオープンキャンパスにする必要がある。	・オープンキャンパス参加者70名以上	・農業系高校等との連携強化 ・農大の情報の提供 ・各機関・団体への周知 ・開催方法の工夫	・農業系高校等との連携強化、農大情報の提供、各機関・団体への周知は継続して実施。 ・4月に高校の進路指導者向けにオープンキャンパスの開催情報を提供。 ・オープンキャンパスを6月に開催時期を前倒して実施。 ・オープンキャンパス開催日を開校日として、在校生による専攻紹介、高校生との交流を実施 ・12月収穫祭時のミニ・オープンキャンパスを実施
2 高い技術力や経営力の習得	【園芸農産課程共通】		・農大産農産物の直売の実施	・毎週1回、一般消費者向けに農大産農産物の直売と12月に収穫祭を実施した。 ・消費者ニーズを把握し、適切な販売手法の習得につながった。		・引き続き、消費者ニーズの把握と販売手法を習得させる必要がある。		・農大産農産物の直売の実施	・毎週1回の農大産農産物の直売を実施 ・12月の収穫祭などを実施
	【施設野菜】 ○栽培技術の習得	・IoT機器が活用できる学生の割合100%	・観察記録と栽培作業日誌の記帳確認 ・IoT機器の活用を前提とした栽培の理論と実際の環境制御技術の指導	・植物の生育と温湿度の関係について、理論を理解させ、実際の栽培を通じて指導した。 ・学生に毎朝の観察に基づいて栽培管理をするよう意識づけを行った。 ・環境測定機器の取扱方法を指導し、その計測結果と週間天気予報をもとに、環境制御装置の設定方法を指導した。 ・実習日誌の記録を習慣づけさせ、学生個々の理解度を確かめながら学生を指導した。	B	・引き続き、就農時等に求められる新しい技術や持続可能な栽培管理技術を習得させる必要がある。	・IoT機器が活用できる学生の割合100%	・観察記録と栽培作業日誌の記帳確認 ・IoT機器の活用を前提とした栽培の理論と実際の環境制御技術の指導	・毎朝の観察と作業日誌記録によって、観察に基づいた管理の意識付けを指導。 ・温湿度と植物の生育の関係を、実際の栽培を通じて指導。 ・環境測定機器の取扱方法と環境制御装置の設定方法の指導。 ・学生の理解度を確かめながら指導。
	・化学農業・肥料のみに依存しない栽培管理技術の習得	・持続可能な農業を実践できる学生の割合100%	・施設野菜における持続可能な農業を実践	・「みどりの食料システム戦略」の考え方、実施方法について、講義・実習で習得させた。 ※6年度から天敵による害虫防除、太陽熱消毒を継続して実施している。			・持続可能な農業を実践できる学生の割合100%	・施設野菜における持続可能な農業を実践	・みどりの食料システム戦略の考え方、実施方法を、講義・実習で指導。 ※天敵の活用、太陽熱消毒の実施
	○経営能力の向上	・担当する品目の所得の把握ができる学生の割合100%	・作型毎の作付計画の作成指導と進捗管理 ・経営記帳の指導	・1年次の6月にプロジェクト課題(卒業論文)の設計検討を行い、作付計画の作成を指導した。9月から担当する品目の栽培を始めさせ、1作を通じて栽培管理に携わるようにした。 ・日々の実習日誌や中間検討会を通じて、学生個々の理解度を確かめながら指導し、技術を習得させた。 ・プロジェクト課題で担当する品目の収量、品質、経費等の記録を習慣づけさせた。 ・プロジェクト課題のとりまとめにおいて、収益を意識するよう、収量(売上)と経費の算出を指導した。	B	・引き続き、就農時等に求められる経営能力を身に付けさせる必要がある。	・担当する品目の所得の把握ができる学生の割合100%	・作型毎の作付け計画の作成指導と進捗管理 ・生産量、販売額及び経費の記録指導	・プロジェクト課題(卒業論文)で取扱う品目の栽培管理ができるように指導。施設野菜のその他の品目の栽培管理も指導。 ・プロジェクト課題設計検討会と中間検討会を実施し、研究のとりまとめができるように指導。 ・プロジェクトで取り組む野菜品目での収量・品質・経費等の記帳を指導。 ・収量(売上)と経費の算出を指導。
○GAPの実践を通じたよりよい施設園芸の実践	・GAPを実践できる学生の割合100%	・施設野菜の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を、講義・実習で指導した。 ・使用資材・機材の整理・整頓や使用履歴を記帳するよう指導した。 ・農機具の安全使用、事故防止について指導した。	A	・GAPの取組は継続して実施するとともに、出来ることから取組項目を増やす必要がある。	・GAPを実践できる学生の割合100%	・施設野菜の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を、講義・実習で指導。 ・使用資材・機材の整理・整頓の指導。 ・使用資材の使用履歴の記帳指導。	

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2 高い技術力や経営力の習得	【露地野菜】 ○栽培管理技術の習得 ・播種から収穫までの栽培管理技術の習得	・習得した学生の割合 100%	・播種から収穫まで一連の基礎知識及び栽培技術の習得	・露地野菜の基礎的な生理生態、知識と管理技術を指導した。 ・一連の基礎知識及び栽培技術を説明し、ほ場で実践させた。日々の管理の状況や実習日誌の内容から学生個々の理解度を確認して指導し、技術を習得させた。	B	・引き続き、就農時に求められる新たな栽培管理技術を習得させる必要がある。	・習得した学生の割合 100%	・播種から収穫まで一連の基礎知識及び栽培技術の習得	・露地野菜の基礎的な生理生態、知識と管理技術の指導。 ・播種から収穫まで一連の栽培管理を実践。 ・観察日誌等で理解度を確認しながら指導。
	・先端技術を活用した管理技術の習得	・学生による栽培計画書及び栽培暦の作成指導	・プロジェクト課題(卒業論文)で取組む品目を決定し、栽培計画と管理計画の作成を指導した。	・学生による栽培計画書及び栽培暦の作成指導				・プロジェクト課題で取組む品目の決定と作付計画、栽培管理の指導。	
	・先進技術を活用した管理作業の指導	・タマネギ全自動移植機、乗用管理機、歩行型収穫機、ピッカーを使って、機械化一貫体系の栽培技術を習得させた。 ・専用の機械を使った実習を行い、機械の操作技術を習得させた。また、作業の省力化や効率化の程度を理解させた。 ・収量(売上)と経費をとりまとめ、収益性を理解させた。	・タマネギの機械化一貫体系の実践と技術習得。 ・その他の専用機械の操作技術の指導 ・プロジェクト課題で取組む品目の収益(所得)の算出を指導。						
○OGAPの実践を通したよりよい露地野菜栽培の実践	・GAPを実践できる学生の割合 100%	・露地野菜の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を、講義・実習で指導した。 ・使用資材・機材の整理・整頓を指導した。 ・資材の使用履歴の記録を指導をしたが、記録が不十分だった。	B	・GAPの取組は継続して実施するとともに、出来るところから取組項目を増やす必要がある。	・GAPを実践できる学生の割合 100%	・露地野菜の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を、講義・実習で指導実施。(R8. 3GAPセミナーを職員が受講) ・使用資材・機材の整理・整頓の実施指導。 ・使用資材の使用履歴の記帳指導。	
○農業機械の基本操作と維持管理方法の習得	・一連の作業を機械で操作できる学生の割合 100%	・農業機械の操作指導 ・農業機械の始業点検方法の指導	・トラクターの操作を指導し、基本操作ができるようになった。しかし、栽培に適した仕上がりとなるような機械の調整方法を習得させることができなかった。 ・トラクター、防除機、管理機等を使用するシーズン前の点検を指導した。 ・日々の始業点検を指導したが、徹底できなかった。	B	・作業機械の調整方法を教える必要がある。 ・農業機械の始業点検を習慣づける必要がある。	・一連の作業を機械で操作できる学生の割合 100%	・農業機械の操作指導 ・農業機械の始業点検の指導	・トラクター、防除機、管理機等の操作実習の実施。 ・ほ場の状態に合わせて作業後の仕上がりより意識した機械の調整方法の指導。 ・農業機械等の点検手順の指導。 ・農業機械等の始業点検の実施。	

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2 高い技術力や経営力の習得	【農産】 ○栽培管理技術の習得 ・播種から収穫・乾燥調製までの栽培管理技術の習得	・スマート水田農業機械が活用できる学生の割合100%	・播種から収穫まで一連の基礎知識及び栽培技術の習得 ・観察記録と栽培管理日誌の記帳確認	・米・麦・大豆の基礎的な生理生態、基礎知識の指導とその確認のため、実習試験による理解度の把握を行った。 ・米・麦・大豆の播種から収穫、乾燥調製まで一連の作業を解説し、実践させ、後日、質疑や実習日誌等で理解度を把握した。 ・手書き(アナログ)ではなく、アプリを使用した記録方法を習得させた。	B	・引き続き、就農時に求められるスマート農業を含む栽培管理技術を習得させる必要がある。	・スマート水田農業機械が活用できる学生の割合100%	・播種から収穫まで一連の基礎知識及び栽培技術の習得 ・観察記録と栽培管理日誌の記帳確認 ・スマート水田農業に関する知識の習得	・米・麦・大豆の基礎的な生理生態、基礎知識の指導。 ・米・麦・大豆の播種から収穫、乾燥調製まで一連の栽培管理を指導。 ・実習試験による理解度の把握。 ・実習日誌の記録を指導。 ・記録内容を確認し、理解度を把握しながら指導。
	○農業機械の基本操作と維持管理の習得	・一連の作業が機械で出来る学生の割合100%	・農業機械の操作指導 ・作物栽培と連動した機械作業の習得指導 ・機械作業ポイントの作成と他学生への説明会の開催	・大型特殊(農耕車)免許及びびけん引(農耕車)免許を農産主の全学生が取得した。 ・フォークリフト講習を農産主の全学生が受講した。 ・農業機械の基本操作及び圃場作業の手順を整理させた。 ・敷地内で運転練習をした上で、機械操作のポイントを意見交換する場を設け、操作技術の向上を図った。	A	・機械操作実習の時間を多く設ける必要がある。	・一連の作業が機械で出来る学生の割合100%	・農業機械の操作指導 ・作物栽培と連動した機械作業の習得指導 ・機械作業ポイントの作成と他学生への説明会の開催	・大型特殊(農耕車)免許及びびけん引(農耕車)免許、フォークリフト講習の取得指導。 ・農業機械の基本操作及び圃場作業の手順を指導。 ・敷地内で練習コースを作り、運転練習を実施。 ・機械操作のポイントを意見交換する場を設け、操作技術を指導。
	OGAPの実践を通したよりよい米・麦・大豆栽培の実践	・穀類(精米)でのJGAP認証取得(新規)	・作物の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を実習中の座学と実践で指導した。 ・記録の効率化を図るために「KSAS」を利用した。 ・使用資材・機材の整理・整頓を指導した。 ・資材の使用履歴の記帳を指導した。 ・12月にJGAP穀物2022(玄米・精米)認証を取得した。	A	・認証の1年後(9月)の維持審査に合格するよう取組を継続する必要がある。	・穀類(精米)でのJGAP認証(維持審査)	・農産の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を実習内の座学、実践で指導実施。 ・使用資材・機材の整理・整頓の実施指導。 ・使用資材の使用履歴の記帳指導。 ・9月中旬(稲の立毛期間中)にJGAP維持審査を実施。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2	【果樹】 ○主要常緑・落葉果樹の栽培技術の習得	・習得した学生の割合 100%	・主要常緑・落葉果樹の生理生態理論について指導 ・果樹の高品質・安定生産技術の指導 ・最新の栽培技術の講義および指導	・生育ステージ毎の栽培管理の講義を行い、実習時には場での生育状況を観察して意見を述べさせて、果樹の生理生態を理解させた。 ・果実肥大、果実品質調査を実施させ、収穫適期を学生が判断し、連年生産できる技術を習得させた。 ・カンキツ、ブドウでの温暖化に対応した最新技術を用いて栽培管理し、課題解決の方策を指導した。具体的には、ブドウではアブサップ液剤を散布することで着色向上し、みかんではテープ処理をすることで日焼け抑制できることを習得させた。 ・県育成品種「佐賀果試35号」等の新品種栽培技術の指導	B	・引き続き、主要常緑・落葉果樹の生理生態理論、栽培管理技術について習得させる必要がある。 ・温暖化に対応するための、さらなる新技術(青色ネット、アブサップ液剤)を習得させる必要がある。	・習得した学生の割合 100%	・主要常緑・落葉果樹の生理生態理論について指導 ・果樹の高品質・安定生産技術の指導 ・最新の栽培技術の講義および指導 ・県育成品種「佐賀果試35号」等の新品種栽培技術の指導	・各樹種における生育ステージ毎の理論を講義。 ・実習終了時に気づき及び感想を整理させ習熟度を確認しながら指導。 ・品目毎に栽培管理計画書の作成を指導し、プロジェクト課題(卒業論文)で取組む品目は生産から販売までの一連の栽培管理技術を指導。 ・温暖化に対応したカンキツ、ブドウの最新の栽培技術についてプロジェクト課題として取組みながら指導。 ・「佐賀果試35号」等のブランド基準を満たす栽培管理技術を指導。
高い技術力や経営力の習得	○スマート農業に関する知識の習得	・習得した学生の割合 100%	・AI技術を取り入れた栽培管理技術の習得 ・省力栽培技術の習得	・温州ミカンとブドウの根域制限栽培、また、ナシ低樹高ジョイント栽培ほ場では、AIによる肥培管理システムを利用して液肥施用技術を習得させた。 ・アプリにより土壌水分の推移を把握して、施肥管理を行い、学生にスマート農業を体験させた。 ・アプリを使ったロボット草刈機の操作及びスピードスプレーヤーの運転実習を行った。 ・スピードスプレーヤー導入園で現地講義(先進農家を訪ねて講義を受ける)を行い、省力栽培体系の実践について理解させた。	B	・AIによる肥培管理システムを利用した液肥の周年栽培技術(より高度な技術)を習得させる必要がある。 ・省力栽培技術を習得する機会を増やす必要がある。	・習得した学生の割合 100%	・AI技術を取り入れた栽培管理技術の習得 ・省力栽培技術の習得	・温州ミカン根域制限栽培ほ場等のAIによる肥培管理システムを利用した栽培管理技術(液肥施用技術)を指導。 ・液肥の周年施用技術について、土壌分析をしながら技術確立を研究。 ・校内に整備したカンキツ見本園を活用し、ロボット草刈り機およびスピードスプレーヤーを使った効率的な圃場管理作業を指導。
	○経営能力の向上 ・果樹経営特性の理解	・習得した学生の割合 100%	・果樹経営特性の理解	・担当品目の労働時間、使用資材、収量、販売金額等についての記帳を指導。作業日誌に記帳するとともにモモ、ピワ、ナシ、ミカン、カキ、中晩柑についてJGAPに準じ、収穫、販売日、数量、販売先を取りまとめることを習慣づけた。 ・現地講義で県内優良果樹経営体の栽培、経営感覚を理解させた。 ・市況や統計資料等と記帳結果と比較して、学生ごとに問題点を整理させて改善策を検討した。また、青果情報アプリで市況を把握し、各品目の有利販売の時期を検討した。 ・プロジェクト課題(卒業論文)で「佐賀果試35号」にマルチ被覆を行って裂果を抑制し、高品質果実に仕上げる技術を習得させた。	B	・次年度は2名が卒業後の就農を希望しており、 就農後にGAPを実践できるようにする必要がある。	・習得した学生の割合 100%	・果樹経営特性の理解	・担当品目の労働時間、使用資材、収量、販売金額等についての記帳を指導。 ・市況や統計資料等と記帳結果と比較して、担当圃場での問題点を整理し改善策を検討。 ・プロジェクト課題等においては、試験結果を検証し経営改善点を整理。
	・GAPの実践を通したよりよい果樹栽培の実践	・果樹(ぶどう)でのJGAP認証取得(更新審査)	・引き続きGAPに取り組むとともに、更新審査に必要な作業を実践	・ブドウにおける管理作業、肥料農薬使用の記帳、JGAPの管理基準点に基づく研修を実施した。 ・9月にJGAP(青果物・ブドウ)認証を更新し、学生のGAP実践力を高めた。			・果樹(ぶどう)でのJGAP認証(維持審査)	・果樹の実習におけるGAPの実践	・GAPの考え方、実施方法を実習内の座学、実践で指導実施。 ・使用資材・機材の整理・整頓の実施指導。 ・ 使用資材の使用履歴の記帳指導。 ・9月中旬に維持審査を実施。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2 高い技術力や経営力の習得	【花き】 ○主要花きに関する基礎知識・栽培技術の習得	・習得した学生の割合 100%	<ul style="list-style-type: none"> ・主要品目の、播種、育苗から栽培、収穫まで一連の生態、栽培管理の基礎知識および栽培技術の習得 ・新規品目や新品種の導入及び栽培技術の習得 ・プロジェクト研究における課題解決能力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要品目の基礎的な生理生態および栽培技術、収穫後の品質保持技術について講義・実習を通して指導した。灌水や定植作業等、随時、個別指導しながら基礎技術の習得に向けて指導した。 ・作業記帳および観察記録を習慣化させ、定期的な記帳状況の確認、習得度チェックリスト、試問等により理解度を把握し、理解度に応じて指導を行った。 ・温暖化対策など情勢変化に対応した、スプレーギクおよびシクラメンの最新品種を新たに導入し、その基礎的な生理生態および栽培技術、最新情報について随時、個別指導しながら基礎知識および技術の習得に向けて指導した。 ・学生の興味や関心および地域課題を反映し、シンテッポウユリの作型適性品種および夏季花苗の新品目の検討に取り組み、課題解決に向けた調査方法および取りまとめに関する基本的スキルを習得させた。 ・関係機関(農業技術防除センター、農業試験研究センター)と連携し、情報収集を行い、プロジェクト研究のとりまとめに活用できた。 	B	・引き続き、学生の理解度を確認しながら、技術を習得させる必要がある。	・習得した学生の割合 100%	<ul style="list-style-type: none"> ・主要品目の、播種、育苗から栽培、収穫まで一連の生態、栽培管理の基礎知識および栽培技術の習得 ・新規品目や新品種の導入および栽培技術の習得 ・プロジェクト研究における課題解決能力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要品目の基礎的な生理生態および栽培技術、収穫後の品質保持技術について講義・実習を通して指導。 ・作業記帳および観察記録を習慣化させ、定期的な記帳状況の確認、習得度チェックリスト、試問等により理解度を把握し、理解度に応じて指導。 ・温暖化対策をはじめ、情勢の変化に対応した新品目や新品種を導入し、基礎的な生理生態及び栽培技術、最新情報について、講義・実習を通して指導。 ・学生の進路意向および地域課題を反映した課題設定を行い、計画立案、調査方法、取りまとめに関して指導。 ・国内の先進事例や県関係機関からの情報を収集。
	○花きのマーケティングにおける基礎知識・技術の習得	・習得した学生の割合 100%	<ul style="list-style-type: none"> ・花きのマーケティングに関する基礎知識の習得 ・花きの加工およびオリジナル商品開発のための技術習得 ・コミュニケーション能力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・県内先進農家での現場講義を通して知識習得や情報交換を図ることができた。また、校内での直売を通して商品ニーズの把握ができた。 ・生花を利用したフラワーアレンジメントや花束等の作成技術について座学および実践により技術指導を行い、技術習得を図った。その結果、2年生1名は国家資格のフラワー装飾検定3級に合格できた。 ・直売や収穫祭等を通して接客方法を指導した結果、おおむねコミュニケーション能力が習得できた。 	B	・引き続き、花きのマーケティングにおける基礎知識・技術を習得させる必要がある。	・習得した学生の割合 100%	<ul style="list-style-type: none"> ・花きの販売手法に関する基礎知識の習得 ・ニーズに対応した商品開発のための手法習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・流通現場派遣研修で販売手法を習得。 ・先進事例に関する情報収集および現場講義を実施。 ・生花を利用したフラワーアレンジメント等の作成技術およびオリジナル商品開発(主に品種開発)のための基礎的手法を指導。
	OGAPの実践を通したよりよい花き栽培の実践	・GAPを実践できる学生の割合 100%	・花きの実習におけるGAPの実践	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPの考え方や実施方法に関して、講義・実習で指導した。 ・使用資材・機材等を整理・整頓し、作業環境の改善を実践させたが、不十分な時があった。 ・使用資材等の使用履歴の記帳を指導・実践させ、作業時には概ね記帳ができた。 	B	・GAPの取組は継続して実施するとともに、出来るところから取組項目を増やす必要がある。	・GAPを実践できる学生の割合 100%	<ul style="list-style-type: none"> ・花きの実習におけるGAPの実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPの考え方や実施方法に関して、講義・実習で指導。 ・使用資材・機材等の整理・整頓を実践し、作業環境の改善を指導。 ・使用資材等の使用履歴の記帳を指導。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2 高い技術力や経営力の習得	【畜産】 ○繁殖生理の学習と繁殖技術の習得			<ul style="list-style-type: none"> ・子牛、肥育牛の市場出荷 ・繁殖牛発情観察記録については、その都度Farmnoteへ入力を行い、そのデータを発情兆候の確認や妊娠鑑定の際に活用できるようになった。 ・繁殖牛の分娩前観察や牛温恵の利用により、12頭の分娩対応が適切にできた。必要に応じ分娩介助を実施した。また、養牛カメラにより遠隔からの観察が実施できた。 ・家畜人工授精技術の習得及び技術の向上 ・今年度7人が家畜人工授精師資格を取得し、8名全員が人工授精を行えるようになった。 ・資格取得後、発情牛に対し家畜人工授精の実践を行った。 ・ICT機器（Farmnote、牛温恵、養牛カメラ）を活用し、繁殖牛管理を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、管理した牛の評価を踏まえて、飼養管理技術を習得させる必要がある。 ・引き続き、人工授精を行う際の発情確認を十分に実施し、受胎率の向上を目指す必要がある。 		<ul style="list-style-type: none"> ・子牛、肥育牛の市場出荷 ・家畜の性周期、発情兆候の理解 ・家畜人工授精技術の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・子牛7頭、肥育牛2頭、経産牛2頭を出荷。 ・繁殖牛発情観察とFarmnote・牛温恵の使用方法を指導。 ・繁殖牛の分娩前観察及び分娩介助の指導。 ・家畜受精卵移植師資格取得へ向け、知識と技術を習得。 ・家畜人工授精の実践指導。 ・全共北海道大会2027出場（高校及び農大の部・繁殖雌牛の部）に向けた対象候補牛の適切な飼養管理の指導。
	○家畜栄養の学習	・習得した学生の割合100%	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料給与技術の習得 ・各畜種（乳牛、種雄牛、豚）の飼料給与技術の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料給与基本プログラムに基づいた飼料給与を行った。（繁殖肥育一貫経営を実践した） ・発育状況把握のための毎月体測を実施した（12回／年）。 ・子牛の発育状況などを確認させるため、子牛セリに参加した（3回）。セリでは他農家の子牛の発育との比較や牛の評価等について実践することができた。 ・畜産試験場での実習を実施した（のべ26回／年）。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、飼料給与プログラムと実際の発育状況を把握しながら給与量を増減することも実施させる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した学生の割合100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料給与技術の習得 ・各畜種（乳牛、種雄牛、豚）の飼料給与技術の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料給与基本プログラムに基づいた飼料給与の実践。（繁殖肥育一貫経営の実践） ・発育状況把握のための毎月体測を実施。 ・子牛の発育状況などを確認させるため、子牛セリに参加。 ・畜産試験場での実習実施（30回／年以上）。
	○家畜ふん尿処理及び利用技術の学習	・習得した学生の割合100%	<ul style="list-style-type: none"> ・糞尿の堆肥化処理技術の習得 ・発酵舎などを利用した堆肥処理方法の学習 ・堆肥の散布技術の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・堆肥舎での関連作業機械を操作した堆肥化処理技術を習得した。 ・畜産試験場での実習時に学習した。 ・ローダーやマニアスプレッタ等の作業機械を用いた圃場散布作業実習を実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・堆肥化処理技術の基本を理解できたため、引き続き、適切な作業を行うことにより、良質な堆肥の生産に向けた指導を継続する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した学生の割合100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・糞尿の堆肥化処理技術の習得 ・発酵舎などを利用した堆肥処理方法の学習 ・堆肥の散布技術の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・堆肥舎での関連作業機械を操作した堆肥化処理技術を指導。 ・畜産試験場での実習時に堆肥処理方法を指導。 ・ローダーやマニアスプレッタ等の作業機械を用いた圃場散布作業実習の実施。
	○飼料作物栽培の学習	・習得した学生の割合100%	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料作物生産技術の習得 ・作業機械操作技術の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏作、冬作の飼料作物を栽培し、生育状況について観察を行った。 ・一連の作業（耕起、施肥、播種、収穫、調整）に関する実習を行い、作業機械の操作技術の習得、向上が図られた。 ・飼料作物収穫後、再生させ複数回の収穫作業を実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、機械操作技術についての向上を図るとともに、機械の整備、安全な使用についての意識を高めていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した学生の割合100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼料作物生産技術の習得 ・作業機械操作技術の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏作、冬作の飼料作物の栽培を指導。 ・作業機械を用いた耕起、施肥、播種、収穫、調整を指導。 ・飼料作物収穫後、再生させて複数回の栽培・収穫を指導。
	○管理能力の向上	・習得した学生の割合100%	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPに関連した知識の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPの考えに基づき整理整頓を実践し、管理環境の改善に取り組んだ。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、整理整頓の実践が不十分な箇所を重点的に指導するとともに、GAPの考え方を習得させる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した学生の割合100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPに関連した知識の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・GAPに基づいた記帳や整理整頓を実践し管理環境を改善を指導。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
2 高い技術力や経営力の習得	○農畜産加工の基礎知識及び加工技術の習得	・農畜産加工の基礎知識と加工技術を習得した学生の割合100%	・野菜・果実・穀類等を使った食品加工に関する基礎的な知識・技術習得のための演習の実施 ・漬物、惣菜、ソース、菓子、製粉・乾燥等の加工等演習の実施	・野菜・果実・穀類等を使用した加工品を製造し、それぞれの原料に合わせた加工技術を習得させた ・加熱、急速冷凍、包装等加工品製造に必要な機械を操作し、衛生と安全に配慮した加工技術を習得させた	A	・安全、安心な商品づくりをするために、食品衛生についての知識、理解を深め、衛生環境を適切に保つための取組を継続する必要がある。	・農畜産加工の基礎知識と加工技術を習得した学生の割合100%	・野菜・果実・穀類等を使った食品加工に関する基礎的な知識・技術習得のための演習の実施 ・漬物、惣菜、ソース、菓子、製粉・乾燥等の加工等演習の実施	・野菜・果実・穀類等を使用した加工品を製造し、それぞれの原料に合わせた加工技術を習得させる。 ・加熱、急速冷凍、包装等加工品製造に必要な機械を操作させ、衛生と安全に配慮した加工技術を習得させる。
	○商品づくりの基礎知識の習得	・商品づくりの基礎知識を習得した学生の割合100%	・商品づくりの基礎知識、包装・ラベル作成等を習得するための演習の実施 ・商品の製造、模擬販売の実施	・商品として販売するために必要な食品表示、ラベル作成の他、直売会での販売等を通して知識を習得させた		・商品づくりの基礎知識を習得した学生の割合100%	・商品づくりの基礎知識、包装・ラベル作成等を習得するための演習の実施 ・商品の製造、模擬販売の実施	・商品として販売するために必要な食品表示、ラベル作成の他、直売会での販売等を通して知識を習得させる。 ・直売会、収穫祭などの機会をとらえ、消費者への対面販売を行う。	
	○衛生管理の基礎知識の習得と実践	・食品衛生についての基礎知識を習得し、商品の製造、管理において適切な扱いができる学生の割合100%	・清掃指導や法律に準じた加工品の製造方法に関する演習の実施	・食品衛生法やHACCP等食品衛生に関する基礎知識を習得させた。特に、HACCPは衛生管理の基本であることから、作成した計画通りに製造管理が進んでいるかを監視する管理実習も実施した。 ・清掃マニュアルを作り、徹底した清掃指導を行った。		・食品衛生についての基礎知識を習得し、商品の製造、管理において適切な扱いができる学生の割合100%	・清掃指導や法律に準じた加工品の製造方法に関する演習の実施	・食品衛生法やHACCP等食品衛生の基礎知識を習得させる。 ・清掃マニュアルを作り、徹底した清掃指導をする。	
2 高い技術力や経営力の習得	【資格等の取得向上】 ○カリキュラムの中で必要な資格取得	・必須の資格合格率100% ※大特、けん引免許等 ・選択の資格合格率50%以上 ※ 農業技術検定、危険物取扱者、フォークリフト、狩猟免許等	・研修の充実	<結果> ・必須資格は合格100%合格だったが、選択資格は26%と低かった。 <具体的取組> ・大特・けん引は1週間に集中して校内で研修をした。 ・資格取得の誘導策として、(特別)講義を実施した。毒劇物や危険物取扱者試験の対策として、「農業と科学」の教科の中で講義を実施するとともに、受験前に特別講義(5校時)を行った。 <参考> ・必須の資格(免許等)の取得 ※大特・けん引免許試験合格率100%(46人/46人)ただし、大特免許については、自動車免許の未取得者を除く。 ・選択の資格の取得 ※検定・免許試験合格率26%(18人/69人) ・農業技術検定2級 1名(1/1) ・農業技術検定3級 2名(2/2) ・危険物取扱者 2名(2/27) ・毒劇物取扱者 0名(0/6) ・農業用ドローン 5名(5/5) ・狩猟免許 8名(8/9) ・農業簿記検定2級 0名(0/2) ・農業簿記検定3級 0名(0/3) ※フォークリフト講習は校外で1~3月に受講。 小型車両系建設機械講習は3月に実施。	C	・選択資格の取得を促す必要がある。	・必須の資格合格率100% ※大特、けん引免許等 ・選択の資格合格率50%以上 ※ 農業技術検定、危険物取扱者、フォークリフト、狩猟免許等	・資格情報の周知 ・事前指導の充実	・年度当初に学生に資格内容(取得のメリット)と試験時期を周知して取得推進。 ・参考図書、オンライン教材の活用推進(自主学習) ・資格や免許に対応した特別講義(過去問題を活用した指導等)の実施。 ・合格レベルに達しない見込みの者には、適宜補講を行うなどして免許取得レベル向上の指導を実施。

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
3 全ての学生の進路決定	○就農・就職決定率	・就農・就職率100%	・就農・就職指導の強化	<p><結果></p> <p>・就農・就職決定率は、令和8年1月末時点で96%。</p> <p><具体的取組></p> <p>・2年生は5月に10日間、1年生は10月に14日間の先進農家派遣研修を実施し、実際の農業現場を体験させた。</p> <p>・1月に流通現場派遣研修を実施し、現場を体験させた。</p> <p>・専攻単位の現場講義で現地農家から直接話しを聞く機会を作った。</p> <p>・1月に県内農家と佐賀大学生の意見交換会に学生を参加させた(農政局佐賀県拠点主催)。</p> <p>・ジョブカフェSAGAから講師を招聘し、1年生及び2年生に対し、キャリアプランニングの講義を行った。</p> <p>・7月に県内農業法人・JAの会社説明会を開催した(8社が参加)。</p> <p>・進路指導専任職員(会計年度任用職員)を1名配置して、情報収集及び提供、面接前の指導を行った。</p>	B	・就農及び農業関連企業への就職など、それぞれの学生にあった進路を早い段階で決定させ、その進路に向かって努力させる必要がある。	・就農・就職率100%	・就農・就職指導の強化	<p>・学生の出身地域の枠を超え、農業法人とのマッチングを考慮して、先進農家派遣研修を実施。</p> <p>・流通現場派遣研修等の実施。</p> <p>・1年生、2年生を対象にキャリアプランニングの講義を実施し、早い段階からの進路指導を強化。</p> <p>・「冬季のつどい」など4Hクラブが主催するイベントへの参加。</p> <p>・ハローワークとの連携、求人情報の提供。</p> <p>・農業法人、企業等の会社説明会(法人プレゼン)の実施。</p> <p>・進路指導専任職員(会計年度任用職員)の配置。</p> <p>・就農準備資金の制度活用を支援。</p>
	○大型特殊(農耕車)、農耕用けん引の免許取得	・免許取得合格率95%以上	・受講生がより理解しやすいよう指導方法を工夫	<p>・運転操作研修において、受講者の技術習熟度に個人差が生じることがあるため、まずは受講者の年齢等を考慮した班編成を行い、班内で補完しあう(教え合う)体制を設定するとともに、指導職員間で情報を共有・連携しながら伴走支援し、受講生全体の習熟度を上げながら、研修全体がスムーズに進むように努めた。</p> <p>・特に経験の浅い担当職員の農業機械の知識や操作指導力のを向上を図るため、指導職員用マニュアルを作成し、担当職員の指導力の向上を図っている。</p>	A	・引き続き、高い合格率を維持する必要がある。	・免許取得合格率95%以上	<p>・受講生がより理解しやすいよう指導方法を工夫</p> <p>・指導体制の維持・強化</p>	<p>・運転操作研修において、受講者の技術習熟度に個人差が生じることがあるため、引き続き、指導職員間で情報を共有・連携しながら、伴走支援し、研修全体がスムーズに進むように努める。</p> <p>・指導職員用マニュアル等を活用し、農業機械の知識や操作指導力などスキルの向上を図る。</p> <p>・研修部職員の資格取得を推進する。</p>
4 農業者研修の充実	【農産加工支援研修】	・受講者数の確保 1講座 10人	・農産加工に興味を持った農業者への周知	<p>・プレスリリースの他、市町や農業振興センター等を通して、農業青年クラブ員や女性組織等への周知をした。</p> <p>・農業士の役員会や、農村ビジネス推進ブロック別担当者会議の際にも周知を行った。</p> <p>・農産加工に係る相談窓口を担うさが農村ビジネスサポートセンターとも連携し、相談者のニーズに応じて、当研修を勧められている。</p>	A	・引き続き、農産加工や6次産業化を進めるため、受講者数を確保する必要がある。	・受講者数の確保 1講座 10人	<p>・農産加工に興味を持った農業者への周知</p>	<p>・農業振興センター、農業経営課、さが農村ビジネスサポートセンター等と連携した受講生の募集</p> <p>・プレスリリースによる研修会開催の周知</p> <p>・これまでの農大HPに加え、農大インスタグラム等SNSを活用した情報提供</p>
	○受講者数	・受講生の理解度 80%以上	・6次産業化の基礎的な知識・技術に関する講義・演習の実施	<p>・農産加工の基礎的な知識習得のため、専門家を招いて、衛生管理、商品開発、原価計算、食品表示制度、マーケティングなどについて講義を実施した。</p> <p>・先進事例調査では、工業技術センターといちごの6次産業化に取り組む農業者を視察した。</p> <p>・アンケートにより理解度を調査した結果、講座内容を概ね理解した受講生は約97%だった。</p>	A	・受講生の理解度 80%以上	<p>・受講生の理解度 80%以上</p> <p>・6次産業化の基礎的な知識・技術に関する講義・演習の実施</p>	<p>・農産加工の基礎的な知識・技術習得のための講義及び演習を実施</p> <p>・受講後のアンケート調査の実施</p>	

目標	評価項目	令和7年度目標	目標達成のための方策	具体的取組及び結果	達成度	次年度の課題	令和8年度目標(案)	目標達成のための方策(案)	具体的取組計画(案)
4 農業者研修の充実	○農業者組織(農業青年クラブ)活動の活性化	・研修受講後の満足度向上 満足度80%以上	・農業青年クラブ員を対象とした各種研修等の実施 ・参加後の聞き取り調査等の実施	・役員理事会、各部(事業部・組織部・冬季のつどい実行部・70周年記念実行委員)会議は、オンライン(Teams)も活用し、クラブ員の負担を軽減した。 ・また、農業青年会議(夏のつどい)は、クラブ員間の交流・連携の強化に重点を置きイベントを実施し、好評だった。今後も続けていきたい。 ・さが農業力向上セミナーは、Sプラス大交流会との共催で実施した。その結果、先輩農家との交流により新たな刺激が得られ、アンケート結果が、非常に満足・満足が100%であった。 ・70周年記念大会の準備や運営をサポートすることで、成功裏に大会を開催でき、クラブ員の自覚やクラブ員間の団結が深まり、特に実行委員会等で中心的に頑張ったメンバー等については、これから次の10年を繋いでくれる存在へと成長してきた。 ・農業青年冬季のつどいに農業大中学生20名程度を参加させ、若い世代の農業者の活動や主張にふれさせることができた。	A	引き続き、各種研修等の実施により、クラブ員一人一人の資質の向上やクラブ活動の活性化を図る必要がある。 また、今後ともクラブ員数を確保していくための一つとして、農業大中学生との交流の場を増やしていくことも必要。 なお、令和9年度には九州沖縄地区農業青年クラブ連絡協議会の事務局を担うことが決まっており、それに向けた準備や体制整備が必要。	・研修受講後の満足度向上 満足度80%以上	・農業青年クラブ員を対象とした各種研修等の実施 ・将来のクラブ員確保に向けて、農大生との交流の機会を増やしていく ・参加後の聞き取り調査等の実施	・役員理事会、各部会会議 ・農業青年会議 ・さが農業力向上セミナー ・農業青年冬季のつどい ・九州、全国の活動への参画 ・研修後、聞き取り及び反省点等のとりまとめ実施。
	○農業者組織(青年農業士)活動の活性化	・研修受講後の満足度向上 満足度 80%以上	・青年農業士を対象に各種研修会の開催(参加しやすさを考慮して企画) ・参加者へのアンケート調査実施	7/29に青年農業士認定証交付式があり、青年農業士46名が認定された。 ・各種研修会 ・農業士との合同研修会(7月、17名) ・全体研修会の開催 1回(11月Sプラス大交流会と共催) ・県外研修への派遣 2名(1月、3月) ・Sプラス大交流会後に参加者(3名)へアンケート調査を実施したが、青年農業士からは回答が得られなかった。	C	・青年農業士は自己の農業経営において、中心的に活動している年代であり、青年農業士が活動に参加しやすくなるような内容について、青年農業士とともに検討を行う必要がある。	・研修受講後の満足度向上 満足度 80%以上 ・参加者へのアンケート調査実施	・青年農業士を対象に各種研修会の開催 ・参加者へのアンケート調査実施	・参加しやすさを考慮した各種研修会の開催。 ・研修会の周知時期を早める。 ・各種研修会 ・情報交換会の開催 3回 ・全体研修会の開催 1回 ・県外研修への派遣 4名程度 ・研修後に参加者へアンケート調査を実施。
	○農業者組織(農業士)活動の活性化	・組織活動の活性化や研修受講後の満足度向上 満足度 80%以上	・農業士を対象とした各種会議・研修会の開催(できるだけ多くの農業士が参加できる内容にする) ・参加後の聞き取り調査等の実施	7/29に農業士認定証交付式があり、新たに農業士45名が認定され、計125名となった。 ○各種会議の開催 ・役員会議 4回(9/11、11/27、2/2、3/12(予定)) ○各部会活動の実施(7部会:9月~3月) ○各種研修会・意見交換会への参画 ・九州・沖縄農業士研究会(11/12~13) ・JAさがグループとの意見交換会(11/27) ・九州農政局幹部と九州・沖縄各県指導農業士との意見交換会(1/14) ・指導農業士全国研究会(1/26~27) ・県農政関係課長との意見交換会(2/2)	B	・引き続き、農業士活動の活性化が図られるよう各種会議・研修会の開催に伴う支援が必要である。 ・R9九州・沖縄農業士研究会に向けた支援体制整備、事前の準備が必要である。	・組織活動の活性化や研修受講後の満足度向上 満足度 80%以上	・農業士を対象とした各種会議・研修会の開催(できるだけ多くの農業士が参加できる内容にする) ・R9九州・沖縄農業士研究会に向けた支援体制整備、事前の準備を行う(場合によっては実行委員会を立上げて進めていく) ・参加後の聞き取り調査等の実施	○各種会議の開催 ・役員会議 4回 ○各部会活動の実施(7部会) ○各種研修会・意見交換会への参画 ・九州・沖縄農業士研究会 ・JAさがグループとの意見交換会 ・九州農政局幹部と九州・沖縄各県指導農業士との意見交換会 ・指導農業士全国研究会 ・県農政関係課長との意見交換会 ・WOMAN EXPO 2026(7/25 SAGAアリーナ)への参加 ・研修後、聞き取り及び反省点等のとりまとめ実施。